

故主教クリストファ木川田一郎師父を偲ぶ

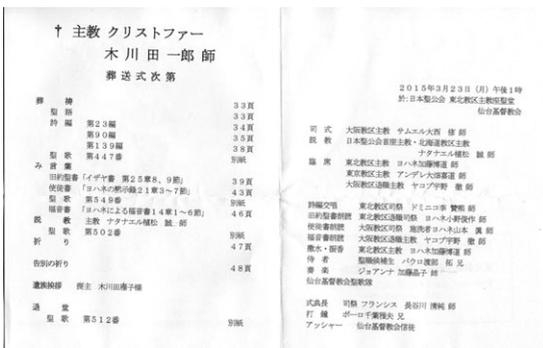
坪井克己

故主教クリストファ木川田一郎師父は2015年3月18日、89歳でこの世の仕事を終えられて、神様の身に召されました。2015年3月23日(月)、東北教区主教座聖堂仙台基督教会で葬送式が執行されました。又、5月30日(土)、川口基督教会で同主教の逝去記念聖餐式が執り行われました。

東京の聖公会神学院(後記1)の3年間と大阪教区の聖職としての生活を共にした同僚として、色々な思い出があります。

I 聖公会神学院

さて、聖公会神学院では、3つのことが学生に課せられ、それを忠実に学生は守りました。



仙台基督教会での葬送式の式次第
2015年3月23日

(1) デヴォーショナルライフ (靈的・礼拝生活)

私たちは、1日5回の礼拝の時間があり、そのうち2回は義務、3回は任意の出席でした。就寝時は学生の司式で執行します。就寝前の安らかな静かな聖歌(この日も終わりぬ……)を歌います。ある時、木川田先生(神学院では、主教は先生と呼ばれていましたのでこれから先生と呼びます)に司式の順番が回って来ました。先生は音程を外して、しかも大声で、真面目に歌い出しました。礼拝堂全体に響きました。「この日も終わりぬ……」と先生が歌い始めた時、礼拝の参加者のあちこちからクスクスと笑い声が聞こえました。さらに司式者は、「もとえ」といって、静かな聖歌を又、繰り返し大声で歌い出しましたので、又クスクスと笑い声が聞こえて、その時の就寝時はできなくて、それぞれ各自が祈って、礼拝堂を出たことを思い出します。

又、新入生歓迎会の時自己紹介とともに、それぞれお国自慢をしたものです。先生は、その時も大きな声で、仙台の民謡「さんさしぐれ」を歌われましたが、これは素晴らしい民謡で、一度聴いたら忘れられない味のあるもので、今日まで何回かこの民謡を聴いてきました。

(2) アカデミックライフ (勉学的生活)

英語で書かれたメーチェンのギリシャ語文法の本がテキストでした。1課ずつ学んだ後、先週の学んだところの試験が毎回あって、いつも先生は100点でした。或る時99点を取り、なぜ1点を引かれたのか悩んだあげく、教授に尋ねました。聖マタイ福音書5章17節に一点一画も消え去ることのできないギリシャ語のヨット1字が落ちていたからです。

又、聖書の内容テストがありました。新旧併せて、66巻(当時まだ旧約続編がなかった)の内容の試験で、創世記

第1章1節から新約聖書の最後の聖ヨハネ黙示録第22章21節までの試験が、1年間に30時間をかけて行われます。第1時間目は、創世記第1章1節から第50章26節の93ページの内容試験です。アブラハム・イサク・ヤコブ……又12人の族長の名前は？ といったもので、日曜学校で教わった名前が、そのまま出てきます。70点以上とらなければ、再度はじめから試験を受けるといった単純な物です。私たちのクラス8名は、1回で合格しました。

木川田先生は、大学卒業後、戦後の非常に苦しい貧困のなかで、1部屋に友人と共に生活をされていました。日勤と夜勤の交代だったので、1枚の布団を共有されたと聞きました。友人が肺結核になり、先生も肺結核になって会社をやめられました。学生時代には剛健な野球選手であった先生も病気には負けられたようです。その後は、療養生活を余儀なくされました。療養生活中に、大阪の叔父上の木川田正毅司祭がおられた、堺の東光学園に連れて生活をされました。木川田正毅司祭は、ジャパン・レスキュー・ミッションから伝道隊・聖公会に移られた司祭です。先生は大阪で生活をしておられるうちに、牧師になる気持ちも固められたのです。神学院の生活はとても厳しい上に、健康であることが求められるので、体力的に十分であるかを自分で確認する意味で、プール学院の数学の非常勤講師をされました。旧制の東京大学の農学部出身ですから、高校の理科系の授業を教えることが可能だったのです。この大阪での療養生活の間に、聖書を丹念に読まれ、又プール学院の毎日の礼拝や宗教の授業などを観たり聴いたりして、牧師への道へ進む思いを一層強くされました。先生は特に旧約聖書がとても好きで、一生懸命聖書を読まれました。神学院の内容試験はほとんど満点だったことを思い出します。旧約聖書の好きな先生は、最後にはヘブライ語にトライされましたが、時間の関係で途中でやめられました。

先生の答案の書き方を披露しますと、問題が出ると3時間の試験中、1時間半位は答える内容をメモして、十分だと思えばそれから回答を書かれる。メモした物をざっと書いていく。途中の書き足しなどが全くないわけで、できあ

がったときは完全に内容が網羅されて完璧だということです。さすが旧制の東大の卒業生とはこのようなものかと思ってもらったように思います。

(3) コミュニオンライフ（交わり・交友・親睦）

草野球を東京都の近辺の神学校とよくしたものです。東京神学大学、農村神学校、青山学院大学神学部、ルーテル神学校、カトリックの上智大学神学部などです。試合後、交歓会をして、それぞれの神学校の様子をいつも楽しく話しあったものです。いつも優勝をしていたのが我が聖公会神学院でありましたが、その理由はメンバーに木川田先生のように大学や高校時代に野球部に属していた本格的な選手がいたことでした。更に木川田先生のフィアンセ雍子姉が、職業を東京に移されて、試合の度におにぎりなどたくさんご馳走を作って応援に来て下さったことが、何よりも勝利の原因になったと思います。

又、寮生活の中では、囲碁、将棋が盛んで、先生も熱中し出すとなかなか終わりませんでした。同様に卓球も素人なりに熱戦を繰り広げられました。

夕食後、武蔵野の西に沈む夕日を眺めながらよく歩いたものです。散歩には絶好の場所でした。すぐ近くの日本体育大学の学生のような練習を見学したり、馬事公苑にいったては馬をはじめとして、色々な動物のことを教えてもらったりしたのも、木川田先生だったのです。

私たちの学年は8名だったので、自分たちでたこ八と名付け、また英語でオクトパス（周りに害を与える鱈）と呼びました。時の森校長と交渉して、1泊2日の大島へ修学旅行をしたのも楽しい思い出であります。

入学から卒業するまで同学年の全員が無事に卒業したのは久しぶりでした。卒業の前に、3年間神学院で学んだ勉

強の総合テストがあつて、全科目それぞれ70点以上をクリアしなければ落第ということだったわけです。

2年先輩の1人は、1年遅れて卒業されました。この1年おくれた先輩が、よく勉強されたので学位をとられました。「1年遅れても、このようにしっかりと勉強したので、学位が取れたのだ。遅れることは、決して恥ずかしいことではない。勉強する良いチャンスだ」と教授は言われました。

II 聖公会神学院卒業後

卒業後、それぞれの遣わされた地域で、聖職として働き、2年に1度、または3年に1度の割合で同期会を開いてきました。札幌、苫小牧、富良野、秋田、箱根、清里、比叡山、六甲などへ旅行に行きました。先生が大阪教区の主教になられた1975（昭和50）年以降も神学院の同期会は続けられました。ある年には、親鮪・子鮪、総勢30人ぐらいたつたと思いますが、貸し切りバスで大阪から神戸の海岸を走り、神戸港の機械化された貨物倉庫を見学し、その後、六甲山に上つて、100万ドルの夜景を観ました。そして、帰阪後、主教邸で、みんなですき焼きをついたことを思い出します。先生はお酒をあまり飲まなかったのですが、いろんな方と食事をともにされ、楽しい会食になることがしばしばありました。このように親鮪と子鮪一緒に旅行しましたが、やがて子鮪が独り立ちをして、又、親鮪のみの旅行になりました。同期会も今や8人のうち3人の友を天国に送つて5人になってしまいました。

木川田主教の大阪での聖職としての働きから1つだけ語るとすれば、庄内キリスト教会のことになります。先生は、神学院卒業後、すぐに結婚されて、聖愛教会に赴任されました。松岡安立司祭の薫陶を受け、やがて、庄内に伝道所を建てることを考え、いわゆる開拓伝道をはじめました。庄内の駅前で、提灯をつつて、基督教の伝道をしたのです。

木川田先生は声をからして、集会の案内をされ、当時の大阪教区の若手の牧師たちも随分手伝ったものです。やがて、駅前借りた家も借家の期限が来たので、庄内の奥の方に入り、池のそばの1000坪の土地を教区と時の信徒の方々とで力を合わせて購入しました。教会の建物を建てるときに、職業訓練所の方々に協力をお願いしたこともありました。

1962（昭和37）年に伝道所を開所されて、1968（昭和43）年には礼拝堂を落成されました。庭にはぶどうの木を植えられ、おいしい実をつけて、私も賞味させていただきました。又、長女の泉ちゃんの名前をそのままつけた機関誌『いずみ』を発刊されました。伊丹空港が近くにあるので、丁度日曜日の説教の時間ぐらいになると、着陸寸前の飛行機の騒音のため、その間説教を中断しなければならなかったことを思い出します。退職した私ですが、今日も月1回庄内の教会に参ります。新しく建て替えられた庄内の教会の周辺は住宅街になり、大阪音楽大学の学舎も建てられています。道路は桜並木になって、気持ちの良い環境の中に教会があり、木川田先生の人柄がそのまま残されたような教会になっています。

桃山学院では学院長として、学院の発展のために寄与されました。日本聖公会では、主教になってからも、忙しい中であって、色々の役職、肩書をもたれました。先生は、その主教としての生活を通して、冷静さと決断力を発揮され、また人々への配慮を欠かさず、適材適所に人々を送られました。それぞれの所管で問題を親身になって考え、相談され、解決のために奔走され、日本聖公会の発展のために力を尽くされました。

先生はまた首座主教として、世界の宗教界の指導者と語られました。黒人解放のために活動された、反アパルトヘイトの指導者マンデラ氏、南アフリカのツツ大主教とも会われ、世界の平和のために寄与されました。先生は、差別や区別することなく、どんな人とも穏やかにつきあわれました。先生の心の中には、「憎む」という言葉がなかった

ように思います。フランチェスコの平和の歌が聖歌にありますが、平和のために生涯を尽くされた方です。いつも思い出すのは、大阪に長年おられたのに、東北弁が最後まで残っていたことです。今では懐かしく思い出されます。

この日も終わりぬ……

世の造り主よ

今宵も守りて

やすらに伏させよ

大声で歌っている主教の声が響いてきます。

(日本聖公会大阪教区退職司祭)

〔略歴〕

1925年3月28日 宮城県仙台市にて誕生

1942年3月 宮城県仙台第二中学校卒業

1945年3月 弘前高等学校理科乙類卒業

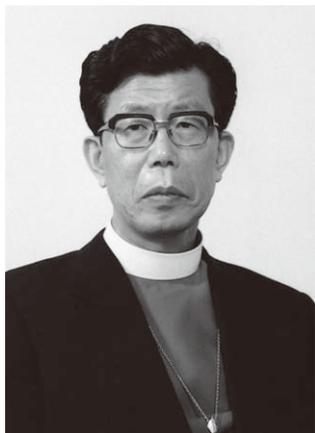
1949年3月 東京大学農学部畜産学科卒業

4月 日本飼料畜産株式会社（1951年8月）

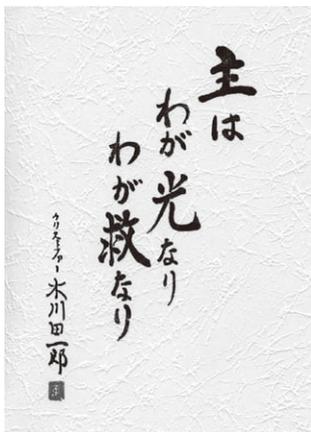
- 1960年3月 聖公会神学院卒業
- 4月 日本聖公会大阪聖愛教会副牧師並びに聖バルナバ病院チャプレン
- 1963年4月 日本聖公会大阪教区庄内キリスト教会牧師
- 1975年9月 日本聖公会大阪教区主教
- 1976年5月 桃山学院学院長
- 1978年2月 プール学院理事長
- 1986年5月 日本聖公会首座主教、立教学院理事、聖公会神学院理事長
- 6月 博愛社理事長
- 1989年9月 聖路加国際病院理事長
- 2015年3月18日 逝去。享年89歳

〔後記〕

1 聖公会神学院は、Central Theological College と呼ばれ、アジアにおける中央神学校として戦後創設されました。大学卒業後に行く神学校でした。出身学部は文科系であろうと、理科系であろうと問題はありませんでした。聖職になるためのトレーニングスクールの要素もありました。入学者は、大学卒業後ストレートに來られた方のほか、色々な前歴の方がおられました。陸軍士官学校や海軍兵学校で学んだ人が、戦後、人生の目的を失い、一八〇度転換して、神学院へたくさん来ておられました。アメリカ人の通訳をしていた人や銀行に勤めていた人も一念発起して神学院に來られていました。大学を出て7年後に、神学院に來られたのが木川田先生でした。



卒業アルバム（2000年）より
※桃山学院高校



木川田一郎師の書
※口絵にカラーあり



大学の「チャペル地割式」の様子（1987年5月）
※前列左から2番目カンタベリー大主教ロバート・ランシー博士

2 木川田主教はユーモアがあり、書道が好きで、色々な作品を残されています。その中から一つ残しておきたいと思えます。

